資経本『貫之集』の位置付け
――承空本との関わりにおいて――

北井佑実子

はじめに

藤原資経が書写した私家集は「資経本」と称され、現在、三十八集三十九帖の私家集が冷泉家時雨亭文庫に蔵せられる。いずれも正応五年（一二九二）から永仁四年（一二九六）にかけて書写したものである。藤原資経の生没年・経歴は不明である。『平家物語』の作者に擬せられている参議正三位の資経は、建長三年（一二五一）に七十一歳で没しており、一連の私家集「資経本」を書写した人物とは別人である。本稿で取り上げる資経本『貫之集』は、同じく冷泉家時雨亭叢書『資経本私家集 一』[1]所収のもので、もと上・中・下三巻本あったうちの、下巻（巻六・巻七）の三一六首が伝わる。

『貫之集』の伝本は第一類本から第三類本に大別されるが、資経本はこのうちの第一類本に属する。資経本『貫之集』の解題を担当された樋口芳麻呂氏の分類によると、資経本は、第一類本の中でも御所本と同系統に属するものとみられる。[2]しかし、その後、御所本の親本とみられる承空本[3]が新たに紹介された。それをふまえて田中登氏は、資経本と承空本が同系統であるということを、系統図で示されている。[4]従って、『貫之集』第一類本のうち、資経本・承空本・御所本の三本が、同系統に属すると考えられる。資経本・御所本の二本によって論じられてきたこの系統の本文は、新たに紹介された承空本との比較検討も踏まえ、再度見直してみる余地があろう。

一方で、他の資経本私家集においては、資経本が承空本の親本であるということが少なからず報告されている。承空本『小野小町集』には次のような奥書がある。[5]

本云／建長六年七月廿日重校合于九／条三位入道本了　彼本哥六十／九首云々　顕家三位自筆／本也　安元二年十一月八日云々

正応五年十二月九日令侍中／詹事丞成尚書之即之校了／藤資経

永仁五年三月十五日於西山房／書写了　承空／承空上人／寄進之

承空本『小野小町集』の解題を担当された藤田洋治氏は、この奥書について、次のように述べられる。[6]「この奥書から、建長六年（一二五四）七月に「九条三位入道本」（二類本系統と推定される「六十九首本」）と校合し、その本は「顕家三位自筆本」で、安元二年（一一七六）の書写であり、その校合本を藤原資経が正応五年（一二九二）に書写し、さらに承空が五年後の永仁五年（一二九七）に転写したものということがわかる。《中略》この承空本の奥書から、資経本『小町集』がかつて存在し、当該本は、多くの承空本私家集がそうであるように、資経本『小町集』の転写本であると判明するのであるが、資経本『小町集』は発見に及んでいない。」つまり、承空本『小野小町集』の奥書が記すように、冷泉家の他の資経本と同様、『貫之集』においても資経本と承空本の間に、直接の書承関係が認められる可能性が窺えるのではなかろうか。

資経本『貫之集』の解題を担当された樋口氏の段階では、承空本は紹介されていなかった。よって、樋口氏は、御所本との比較検討において資経本と御所本の間に親子関係が認められないと判断された。[7]その根拠は歌数の違いにあり、資経本が持たない八首を御所本が有していることである。その後、御所本の親本と見られる承空本が紹介されたが、承空本は御所本が持つ八首を有していないのである。さらにその後、冷泉家時雨亭叢書『承空本私家集 中』に『朝光集』の断簡一葉が紹介された。[8]この『朝光集』の断簡が、御所本が有する八首に該当することが明らかになった。つまり、同じ承空本である『朝光集』の断簡が、御所本の書写段階には承空本『貫之集』に混入、御所本はその『朝光集』の断簡も誤って書写してしまい、八首の歌数の違いが生じたのである。[9]これは私家集にはしばしば見られることで、ある作品の綴じ糸が切れ、その一部が元通りに綴じ直されずに、誤って他作品に綴じられてしまう現象と言えよう。樋口氏が親本説を否定した根拠となる御所本の八首は、『朝光集』の混入という現象で説明がつく。つまり、樋口氏の説は、御所本の親本である承空本との比較検討により、新たに見直す余地があろう。本稿では、『貫之集』伝本中、同系統である資経

本と承空本の間に、直接の書承関係があるか否かを主として検証する。

『貫之集』の第一類本

ここで、資経本が属する『貫之集』第一類本の諸本を確認する。

第一類本

①歌仙家集本（九巻八八九首）正保四年（一六四七）版本

- 陽明文庫本（九巻八九二首）
- 桃園文庫本（九巻八九二首）
- 村雲切（巻五の一部と巻八及び断簡七七葉二五〇首）

②素寂本（巻一～巻四の五四五首）

③西本願寺本（十巻七二七首）

④資経本（巻六・巻七の三一六首）

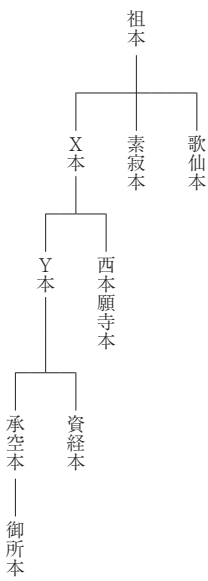
⑤承空本（七巻九二二首）／御所本（七巻九三〇首）

『貫之集』第一類本は同一祖本より派生したと想定され、大きく五系統に分かれる。この分類は主に巻の構成に拠るものであり、①九巻仕立ての歌仙本系、②前半部（巻一～巻四）のみの素寂本、③十巻仕立ての西本願寺本、④巻六・巻七のみの資経本、⑤七巻仕立ての承空本系となる。その巻の構成を、歌仙本を基準に示すと次の表のごとくである。

	屏風歌	屏風歌	屏風歌	屏風歌	恋	賀	別	哀傷	雑
歌仙本（九巻）	巻一	巻二	巻三	巻四	巻五	巻六	巻七	巻八	巻九
素寂本（巻一～四）	巻一	巻二	巻三	巻四					
西本願寺本（十巻）	巻一 巻二	巻二 巻四 巻五	巻三	ナシ	巻六	巻七	巻八	巻九	巻十
資経本（巻六・七）							巻六	巻六	巻七
承空本（七巻）	巻一 巻二	巻二 巻四 巻五	巻三 巻五	巻五	巻七	巻五	巻六	巻六	巻七 巻五

まず、前半部屏風歌（巻一～巻四）について、歌仙本・素寂本においては、屏風歌がほぼ年代順（延喜五年～天慶八年）に配列されている。それに対して西本願寺本・承空本は、屏風歌の配列が年代順ではなく共通の乱れを有する。右表の歌仙本巻二（屏風歌）を例に挙げて説明すると、歌仙本・素寂本では巻二に位置し年代順に配列されている屏風歌が、西本願寺本・承空本では、巻二・巻四・巻五に散布され、屏風歌は年代順に配列されていないという次第である。さらに、歌仙本巻四に相当する歌を、西本願寺本はすべて欠いている。後半部分（巻五～巻九）に関しては、前半部のように西本願寺本・承空本ともに共通の配列を有してはいないが、とりわけ恋部の位置には注意を要す

る。歌仙本・西本願寺本では前半部屏風歌の次に位置する恋部が、資経本・承空本では巻末の巻七に位置している。よって、資経本も承空本と同様、七巻本仕立てと考えてよかろう。以上見てきたごとく『貫之集』第一類本の関係を系統図で示すと左のごとくとなろう。[10]



資経本の歌序と歌数

次に、資経本の歌序と歌数を見ていく。資経本は、巻六（別・かなしひ）・巻七（雑・恋）の三一六首を収録。その歌序・歌数は、承空本と完全に一致する。[11]

資経本	承空本
巻第六　別（一～四二）	巻第六　別（六〇七～六四八）
かなしひ（四三～七三）	かなしひ（六四九～六七九）
巻第七　雑（七四～一七一）	巻第七　雑（六八〇～七七七）
恋（一七二～三一六）	恋（七七八～九二二）

御所本に混入した『朝光集』の八首は、資経本では一一番歌と一二番歌の間、承空本では六一七番歌と六一八番歌の間に位置する。歌序・歌数ともに完全に一致する資経本と承空本は、この段階において、すでに直接の書承関係が想定されると言えるのではなかろうか。

本文異同①

資経本と承空本は、歌数・歌序ともに完全に一致しているが、これより細かな本文異同を見ていく。まず、資経本と承空本が同系統であるということを、例を挙げて今一度確認する。[12]

やまかけにつくるやまたのこかくれてほにてにこひそわひしかりける（五五一）

歌・西「ほにいてぬ」承「ほにてに」

傍線部「ほにてに」は承空本と一致する。それに対して、歌仙本・西本願寺本は「ほにいてぬ」となっている。しかし、資経本・承空本の「ほにてに」では解釈が通らず、ここは歌仙本・西本願寺本の「ほにいてぬ」が適当であろう。つまり、資経本・承空本は同じ誤りを有していると言えよう。

山人のこゑのまに〳〵たつねゆかはいつくともなくわれや

まとはん（六三〇）

①歌「やまひこの」西「山ひこの」承「山人の」

②歌「いふこともなく」西「いつこともなく」

承「いつくともなく」

傍線部①「山人の」は、異本注記で「ひこは」となっている。異本注記はなくとも、資経本と一致するのは承空本である。歌仙本「やまひこの」、西本願寺本「山ひこの」とは対立している。ここは、第二句に「こゑ」とあることからも、歌仙本「やまひこの」・西本願寺本「山ひこの」が適当であろう。資経本・承空本は「山人の」の「と」と「やまひこ」の「こ」を誤写したと推測出来よう。この例においても、資経本と承空本は同じ誤りを有している。傍線部②「いつくともなく」も、承空本と一致し、歌仙本「いふこともなく」、西本願寺本「いつこともなく」と対立する。ここは、第五句「われやまとはん」とあることから、西本願寺本「いつこともなく」または資経本・承空本「いつくともなく」が適当であろう。

①おなし中将のものへゆく人にひうちのてうとをしてそ
　れにたきものをくはへてやるによめる
③おり〳〵にうちくたく火のけふりあらはこゝろさすかをし
　のへとそおもふ（七一九）

①歌「おなし少将」西「おなし少将の」

承「おなし中将の」

②歌「ひうちのくして」西「火うちの調度を調して」

承「ひうちのてうとをして」

③歌・西「うちてたくひの」承「うちくたく火の」

傍線部①「おなじ中将の」は承空本と一致し、歌仙本「おなし少将」、西本願寺本「おなし少将の」となっていて、対立する。資経本では、二首前の七一七番歌の詞書に「もろうちの中将」とあることから、ここでの中将は「師氏」と見てよかろう。師氏は、承平四年に左少将、天慶四年に左中将に就いている。一首後の七二〇番歌の詞書には「もろまさの侍従のよませ給へる」とあり、師尹は承平五年から七年まで侍従に就いている。このことから師氏の官職を推測すると、承平四年以降の「左少将」が望ましいのではなかろうか。つまり、歌仙本・西本願寺本の「少将」がより適当であり、資経本・承空本の「中将」は誤りとなる可能性が高いと言えよう[13]。傍線部②「ひうちのてうとをして」は、承空本が資経本と完全に一致し、歌仙本・西本願寺本とは対立する。傍線部③「うちくたく火の」においても承空本と一致し、歌仙本・西本願寺本「うちてたくひの」と対立する。しかし、詞書に「ひうちのてうとをして」とあることからも、

ここは、資経本・承空本の「うちくたく火」よりも、歌仙本・西本願寺本の「うちてたくひの」が適当であろう。ここでも傍線①と同様に、資経本と承空本は同じ誤りを有している。

ここに挙げた例は、いずれも、資経本・承空本の本文が一致し、歌仙本・西本願寺本とは対立している。さらに、資経本と承空本は、誤写、解釈の面において同じ誤りを有している。従って、両者が同系統であるということは明白であろう。

本文異同②

次に、同系統である資経本と承空本の本文が対立する例を挙げる。同系統である両者の本文が対立した際、実際にどのような意義を見出すことが出来るかを見ていく。[14]

たむけせぬわかれする身のわひしきは人めをたひとおもふなりけり（五五三）

歌・西「たむけせぬ」承「たむけする」

傍線部「たむけせぬ」は、歌仙本・西本願寺本と一致し、承空本「たむけする」と対立する。この歌は「手向けが出来ない別れ」を「わびしい」と詠んでいることから、承空本の「たむけする」では解釈が通らない。資経本・歌仙本・西本願寺本の「たむけせぬ」に拠るべきであろう。従って、この例では資経本が承空本の誤りを訂正出来ると言えよう。

よそにみてかえるゆめたにあるものをうつゝに人をわかれぬるかな（五六一）

歌「夢たに」西「ゆめたに」承「ゆめちに」

傍線部「ゆめたに」は、歌仙本・西本願寺本と一致し、承空本「ゆめちに」と対立する。資経本・歌仙本・西本願寺本の「ゆめたに」の「た」と、承空本の「ゆめちに」の「ち」は、誤写の可能性があると言えよう。歌の解釈は、類推の副助詞「だに」を含む、「恋しい人との別れは夢でさえさびしいのに現実でも別れることになってしまった」が適当であろう。つまり、承空本の「ゆめちに」では解釈が通りにくく、ここは、資経本・歌仙本・西本願寺本の「ゆめたに」に拠るべきであろう。この例においても、資経本が承空本の誤りを訂正出来よう。

あはれともこひしとも思いろなれやおつるなみたにそてのそむらむ（五七九）

歌・西「おつる」承「たつる」

傍線部「おつる」は、歌仙本・西本願寺本と一致し、承空本「たつる」と対立する。ここでも、資経本・歌仙本・西本願寺本の「おつる」の「お」と、承空本の「たつる」の「た」は、誤写の

可能性を指摘出来よう。さらに、第四句に「なみた」とあることから、資経本・歌仙本・西本願寺本の「おつる」が適当であろう。従って、この例においても資経本が承空本の誤りを適正出来るのである。

あひみすてこひしき事をたとふれはくるしきたひはものならぬかな（六五九）

歌「旅」西「たひ」承「こひ」

傍線部「たひ」は、歌仙本・西本願寺本と一致し、承空本「こひ」と対立する。この歌は、「相手に会わずにいる恋しい気持ち」を「旅」に例えている。つまり、承空本の「こひ」では解釈が通りにくい。また、資経本・歌仙本・西本願寺本の「たひ」の「た」と、承空本の「こひ」の「こ」は、誤写が指摘出来る。この例においても、資経本が承空本の誤りを訂正出来よう。

これまで、本文異同②で見てきた例は、いずれも資経本が承空本の誤りを訂正出来るものである。同系統である資経本と承空本の本文が対立した際、資経本が承空本の誤りを訂正出来るということは、資経本と承空本の間に直接の書承関係があるということを想定してよいのではなかろうか。その可能性を視野に入れながら、もう少し例を見ていく。

な□わにてよめる

みつのうらにおふるたまもをかりそめのあまとそわれはなりぬへらなる（七七五）

歌・西「あまとそ」承「たまとそ」

※「□」は判読不可能。承空本で補うと「に」となる。

傍線部「あまとそ」は、歌仙本・西本願寺本と一致し、承空本「たまとそ」と対立する。これまで見てきた例と同様に、資経本・歌仙本・西本願寺本の「あまとそ」の「あ」と、承空本の「たまとそ」の「た」は、誤写が指摘出来よう。さらに、承空本の「かりそめのたまとそ」では、解釈が通りにくい。ここでも同様、資経本が承空本の誤りを訂正出来る。

花をおりてこれかれかさすついてによめる

かさせと□①はなさくやとはたのまゝ身の□②つゑにときしなけれは（八二五）

歌「かさせとも」西「かさねとも」承「かさをとも」

※「□」は判読不可能。承空本で補うと①「も」②「なり」となる。

傍線部「かさせとも」は、歌仙本と一致し、承空本「かさをとも」と対立する。資経本・歌仙本の「かさせとも」の「せ」と、承空本の「かさをとも」の「を」は、誤写が指摘出来よう。さらに、詞書に「花をおりてこれかれかさすついてによめる」と

あることからも、当然、承空本の「かさをとも」では解釈が通らない。この例においても、資経本が承空本の誤りを訂正出来ることは、言うまでもなく明らかであろう。

あと僅か、例を見ていく。

身をせはみそてよりもふるなみたにはものおもふもなき人
□ぬれけり（五八四）

歌「思ひ」西「おもひ」承「おもひ」

※「□」は判読不可能。承空本で補うと「も」となる。

たなはたのあしたにみつねかもとより
きみにあはてひとひふつかに□□ぬれはけさひこほしのこゝ
ちこそすれ（八一〇）

歌「こそすれ」西「すらしも」承「すらしも」

※「□」は判読不可能。承空本で補うと「なり」となる。

五八四番歌・八一〇番歌の二例は、これまで本文異同②で見てきたものとは、些か別種である。まず、五八四番歌の傍線部「おもふ」は、異本注記では「おもひ」、承空本では「おもひ」となっている。つまり、承空本は資経本の書入を本文化し、その本文に反映させていると言えよう。八一〇番歌も同様に、傍線部「こそすれ」は、異本注記では「すらしも」、承空本は資経本の書入を本文化し、「すらしも」となっている。承空本が資経本の書入を本文化しているということは、資経本が承空本の親本である可能性が指摘出来るのではなかろうか。

以上、本文異同②で見てきた八例は、同系統である資経本と承空本の本文が対立し、さらに、資経本が承空本の誤りを訂正出来るものである。このような例は他にも枚挙にいとまがないほど見出される。その際、資経本の本文が、系統を異にする歌仙本・西本願寺本と一致していることも看過出来まい。同系統である二本の本文が対立した際、どちらか一方でその本文の誤りを訂正出来るということは、両者に直接の書承関係が認められると想定してよいのではなかろうか。さらに、承空本が資経本の書入を本文化したであろう例も確認出来ている。つまり、他の冷泉家の私家集と同様、『貫之集』においても、資経本は承空本の親本であると考えてよいのではなかろうか。

本文異同③

資経本には、承空本の誤りを訂正出来る箇所が多く見られる。よって、『貫之集』において資経本は承空本の親本であるということが確認出来た。次に挙げる例は、資経本と承空本が対立し、これまでとは異なり資経本に誤りが認められるものである。

ものへゆく人にやらんとて人のこふにをくる

あつらへてわするなとおもふ□□ろあれはわかみをわくるかたみなりけれ（七二七）

歌・西・承「けり」

※「□□」は判読不可能。承空本で補うと「こゝ」となる。

傍線部「けれ」は、歌仙本・西本願寺本・承空本の「けり」と対立するが、ここは係り結びを要求する必要がないため、歌仙本・西本願寺本・承空本の「けり」が適当であろう。資経本は「けり」と「けれ」を誤写したと言えよう。さらに、承空本は転写の際、資経本の誤りに気付き、親本である資経本の「けれ」を、「けり」に意識的に改変した可能性が考えられよう。

同じ例として、

ほとゝきすけさなくこゑにおとろけは□みをわかれしときにさりけり（七六一）

歌「にそ有ける」西「そきにける」承「にそありける」

※「□」は判読不可能。承空本で補うと「き」となる。

傍線部「にさりけり」は、歌仙本・西本願寺本・承空本と対立する。資経本は「にそありけり」の「そあり」が変化した「にさりけり」となっている。歌仙本「にそ有ける」、西本願寺本「そきにける」、承空本「にそありける」は、係り結びの法則が成立している。ここは七二七番歌とは異なり、係り結びを要求する必要があろう。過去の助動詞「けり」は連体形の「ける」が望ましく、歌仙本・西本願寺本・承空本が適当であろう。資経本においては「にさりける」の形が相応しい。この例においても同様、転写の際に承空本が意識的に改変した可能性が指摘出来よう。

さらにもう一例、

返し

おしからぬいのちなりては世の中の人のいつ□りになりもしなまし（八〇五）

歌・西・承「なりせは」

※「□」は判読不可能。承空本で補うと「は」となる。

傍線部「なりては」は、歌仙本・西本願寺本・承空本の「なりせは」と対立する。ここは、第五句「なりもしなまし」の「まし」があることから、「～せば～まし」の反実仮想の形が望ましい。よって、歌仙本・西本願寺本・承空本の「なりせは」が適当であろう。ここでも同様に、承空本は反実仮想の形に鑑みて、転写の際に意識的に改変した可能性が指摘出来よう。

例に挙げたごとく、直接の書承関係が認められる資経本と承

空本の本文が対立し、親本である資経本に誤りがある場合、両者の相違は承空本の意識的な改変（意改）によるものであることがわかった。従って、資経本の誤りは、承空本を除いた歌仙本・西本願寺本で訂正するべきと言えよう。承空本は、資経本の誤りを訂正する根拠にはならない。このような例は、ここに挙げた三例がすべてである。

資経本の虫損部分

資経本が承空本の親本である以上、承空本は『貫之集』本文研究上、親本である資経本の存在が確認されたゆえ、一般論としてはその役目を終えたとみることが出来よう。しかしながら、資経本は巻六・巻七のみの零本であり、さらに虫損が甚だしく、判読不可能な箇所が少なくない。つまり、承空本によって補訂しなければならないのである。次に示すのは、資経本の虫損部分を承空本で補訂出来る例である。「□」で示した箇所が資経本の虫損部分となる。

あはれてふことにしるしはなけれともいはて□①えこそあ□②ぬ□③のなれ（五八〇）

承①「は」②「ら」③「も」

あめ□①□はうつろひ□②す□③はなさくらうすきこゝろも□④□おもはなくに（六〇四）

承①「ふれ」②「や」③「き」④「わか」

かきくもりあめふることに道しらぬ□①□□りやま□②□と□③□、かな（六三六）

承①「かさと」②「にま」③「わる」

からころも□①もと□②あらふなみたこそ□③まはとし□④ると□⑤□□□けれ（六四一）

承①「た」②「を」③「い」④「ほ」⑤「きなかり」

てる月もかけみなそこにうつりけり□①□□ことなき□②ひ□③するかな（六五二）

承①「にたる」②「こ」③「も」

ひとし□①□われな□②□つゝとしふれはうくひす□③□もの□④□はきく（六五七）

承①「れす」②「けき」③「のね」④「とや」

あきはきの□①た□②□みつゝゆふされはいつしか□③□にな□④□たるかな（六六九）

承①「し」②「はを」③「のね」④「きわ」

いかてわれ人にもとはんあかつきの□①か□②わかれ□③□に、□④たると（六七二）

承①「あ」②「ぬ」③「やな」④「に」

とをくゆく人のため□[1]□□□そてのなみたのたまもおしから□[2]□□（七一〇）

承①「にはわか」②「なくに」

左中弁よしみつの朝臣の人のむまのはなむけのぬさにかゝんとてよませたるなつなりけれは

いとまたきみゆるもみ□[1]□□□かためおもひそめてしぬさに□[2]□□□る（七一五）

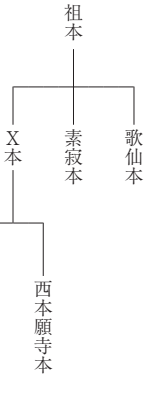
承①「ちはきみ」②「そありけ」

紙幅の都合上、全ての例をここに紹介することは出来ないが、ここに挙げた十例のようなものは、全体において枚挙にいとまがない。資経本が承空本の親本であることは明白だが、このような虫損箇所については、承空本の力を得ないと、資経本の本文復元は困難である。

おわりに

『貫之集』において、資経本と承空本には直接の書承関係があり、他の冷泉家私家集と同様、資経本は承空本の親本であることが明らかになった。資経本と承空本は、同じ誤りを有しており、資経本が承空本の誤りを訂正出来る箇所が多く見出される。さらに、承空本が資経本の書入れを本文化したであろう箇所も認められる。

資経本『貫之集』の解題で、「書陵部本は資経本を親本として書写しているのではないかと考えたいところだが、必ずしもそのようには断ぜられない[15]」と樋口氏が述べられた根拠は、『朝光集』の八首が混入した御所本との比較検討によるものであった。つまり、その八首の存在が資経本と御所本の親子関係を否定する決定打となっていたのである。御所本の親本である承空本と資経本の比較検討では、歌数はまったく一致し、さらに細かな本文異同においても、資経本が承空本の誤りを訂正出来ることが確認出来た。以上のことを踏まえて、『貫之集』第一類本主要伝本の関係を示すと、左の系統図のようになろう[16]。



『貫之集』第一類本は同一祖本より派生しながら、歌序の相

違、歌の出入りにより系統を異にするようになった。まず、前半部屏風歌の歌序に乱れが生じたことにより、西本願寺本・資経本・承空本・御所本の共通祖本X本が、歌仙本・素寂本と分かれた。次に、前半部屏風歌の次に位置する恋部が、巻末の巻七に移動したことにより、資経本・承空本・御所本が西本願寺本と分かれたと言えよう。従来、「承空本系統」と称していたこの系統は、今後、「資経本系統」へとその名称を改めるべきであろう。

しかし、資経本は虫損が甚だしく、承空本による補填が不可欠となる。承空本の力を得ないと、資経本本文の復元は極めて困難である。承空本は、資経本という親本の存在が明らかになったことにより、本文研究上その役目を終えたとみることが出来よう。しかし、資経本の現存本文は『貫之集』全体の上・中・下の三巻のうち下一巻しか伝わっておらず、完本ではないこと、さらに虫損が甚だしいことを鑑みると、その転写本たる承空本が効力を発揮し、その本文も充分評価出来ると言えよう。

〈注〉

（1）冷泉家時雨亭叢書第六十五巻『資経本私家集 一』（朝日新聞社　平成十年）。解題は樋口芳麻呂氏。

（2）注（1）に同じ。

（3）冷泉家時雨亭叢書第六十九巻『承空本私家集 上』（朝日新聞社　平成十四年）。『貫之集』の解題は田中登氏。

（4）田中登氏「素寂本貫之集の意義」（『関西大学文学論集』第五十四号　平成十六年）。

（5）冷泉家時雨亭叢書第七十一巻『承空本私家集 下』（朝日新聞社　平成十九年）。『小野小町集』の解題は藤田洋治氏。

（6）注（5）に同じ。

（7）注（1）に同じ。

（8）冷泉家時雨亭叢書第七十巻『承空本私家集 中』（朝日新聞社　平成十八年）。

（9）『朝光集』の混入ついては、冷泉家時雨亭叢書第六十九巻『承空本私家集 上』（朝日新聞社　平成十四年）の解題において田中登氏が言及している。

（10）注（4）の田中氏の系統図に拠る。

（11）歌番号は、資経本・承空本ともに、それぞれの通し番号で示した。

（12）本文は資経本、歌番号は『私家集大成』に拠る。以下、和歌の引用はすべて同様の措置をとる。諸本の略号は、歌→歌仙本　西→西本願寺本　承→承空本。なお、素寂本は前半

部（巻一～巻四）のみである為、本稿では取り上げない。

（13）七一九番歌の「中将」と「少将」については、木村正中氏が次のように述べられる。「師氏の官歴は、天慶四年左少将から左中将に転じたので、この「別」の部がだいたい年代にそう点から判断して「少将」がよりふさわしい。」（新潮日本古典集成『土佐日記　貫之集』新潮社　昭和六十三年）

（14）資経本と承空本が対立した場合の異同のみを示している。すべての異同を示しているわけではないことをお断りしておく。以下、本文異同③も同様の措置をとる。

（15）注（1）に同じ。

（16）注（10）に同じ。

（きたい　ゆみこ／淀商業高等学校非常勤講師）